

---

# **女装生活 ~学園と寮との2重生活~**

タママ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女装生活～学園と寮との2重生活～

### 【NZコード】

N1267M

### 【作者名】

タママ

### 【あらすじ】

生まれつき不思議な力を持つている如月一刀、だがその力を人のために使えば人々から恐れられ、追放される。

ならば人と付き合わなければいい、友達を作らなければ、失うことはないから・・・・・

そう思っていた一刀が転校した学園で起こる事件や心やさしい寮のメンバーによって一刀の心情は少しづつ変化していく・・・・・  
・・・もう一度だけ、人を信じることができたら・・・・・



## プロローグ

「なんでこんなことに・・・」

一人部屋の中で頭を抱えて唸つて いる男がいた。

――如月一刀この物語の主人公である。――

彼は普段は普通の高校に通う一般男子学生だが、彼には生まれつき持つている不思議な力があつた。闇を討つ力、人々の傷を癒す力、人の能力を増強させる力など、彼自身が自分のもつて いる能力についてすべてを把握できていないほど、彼には力があつた。

だがそれは、周りの人間からすればただの脅威でしかなかつた。いくら彼が人のために力を使おうと、異常なまでの彼の身体能力をみた人間は彼を恐れて

仲間を集めて彼を追放しようとする。助けてもらつたことなど忘れ、ただ自分から遠ざけるように彼を追い込むことしかしなかつた。  
・・・たとえそれが、彼とどれだけ仲の良かつた友達だつたとしても。

それから彼は人とふれあうことを極力避け、できるだけ一人でいるよう心がけた。

その方が自分の力がばれた時に悲しい思いをしないで済むから、友達を作らなければ失うことはないから。そう自分に言い聞かせながら生きてきた。

これから話すのはそんな彼が何度もになるかわからない転校した先の学園で起きた物語である。

## プロローグ（後書き）

初めての投稿です、友達に「女装」と「主人公が不思議な能力をもつてゐる」の二つを含めた小説を書くよう言われたのがきっかけです。更新は遅くなるかもしれませんがあんまりお付き合いしていただけると光栄です。

## 校長にだまされ…・・・（前書き）

まず最初にいっておきます。女装といつても主人公が好き好んでやるわけではありません。それだけは頭に入れておいてください。初めての作品なのでとても変な小説になるかもしれませんがないとにかくやっていただきたいと思います。

## 校長にだまされて……

数時間前……

一刀は新しく通うことになつた学園の校長室にいた。

校長「君が明日からこの学園に通うことになつた一刀君だね。都会の方から来た君には少々不便かもしれないが、田舎には田舎なりのいいところがあるからね。なれてくれば君にとつて都會よりも住み心地のいい場所になるはずだよ。なんたつてここには海がある、それに山だつてすぐ近くにある、美しい自然に囲まれた素晴らしい場所だと私は思つてゐる」

一刀「はあ……」

さつきから校長が妙にそわそわした感じでこの町のいい所を紹介している。今ちようど5回目の海と山の紹介を聞いたところだ。そろそろ同じ話ばかりされるのも辛くなつてきたので单刀直入に聞くことにした。

一刀「で、俺の住む場所はどこになるんですか？」  
校長はその言葉を聞くと急に動きが止まり、とても焦つているようだつた。

一刀は組織に拾われてから、組織の方に住まいを提供してもらつていたのだが、どうしても組織の用意する家は薄暗い場所や路地裏の分かりにくい場所が多くつた。  
組織としては秘密がばれないように、ということだったのだがさすがにそれは住み心地が悪いので、今回の転校で全寮制の学校に転校することにした。

そして校長が男子寮を空けていてくれるということで場所を聞きに来たのだが……

校長「それが……ね、男子寮あかなかつたんだよね……」

一刀「え？」

校長「転校するはずだつた生徒がやつぱり残ることになつて部屋が

空かなかつたんだよ」

校長がすまなさそうな顔で言った。

一刀「それじゃ、俺の住む場所はどうなるんですか？」

今回は田舎の方の学園なので近くにマンショングループなどは一切ないし、かといって組織に準備してもらつのもさすがに時間がかかるてしまふ、となると野宿しか・・・でもさすがにそれはつらいので何とかならないか校長に聞いてみた。

校長「・・・そうだね、一つだけ手はあるんだが・・・」

その言葉を聞いて一刀は安心した。この際野宿でなければどんな汚い場所でもいいと思っていたので、その方法を頼ることにした。

校長「とりあえずこの紙に書いてある所へ行ってみてくれ、詳しいことはそこのお寮長に聞けばいい」

一刀「わかりました。それでは、失礼します」

一刀は扉を閉めると紙を確認した。

【 町 地区——寮】

なぜか——の部分だけ黒いマジックで塗りつぶしてあつたが場所は分かつたので早速行くことにした。

一刀「・・・で、ここら辺にあるはずなんだが」

紙に書いてあつた場所に行くと建物が数件立つてているだけで、あとは商店街の方へ続く道ぐらいしかなかつた。

だが男子寮は見当たらず、あるとすれば女子寮のよつたな建物だけだつた。

一刀「おかしいな・・・」のあたりのはずなんだが

もう一度あたりを見渡すと一人の女の子がいたので聞いてみることにした。

一刀「すみません、このあたりに男子寮があるって聞いてきたんですけど・・・」

そういうつて校長からもらつた紙を見ると女の子が驚いた顔をしてこつちを見た。

？？「ああ、君が話の・・・うん、顔もきれいだし体の方も毛がほとんどないから大丈夫そうね。あとは・・・大丈夫みたいね。」いきなり顔や体を確認し始めたので驚いているとその女の子が手をひっぱり

？？「ついてきて、寮長のところに連れて行ってあげる。」

そういうと女子寮の方へ走り始めた。

一刀「つてちょっと待て、俺は男子寮の方に行きたいんだ、女子寮の方じゃないぞ」

そういうと女の子は不思議そうな顔をして

？？「あら？ 校長先生から何も聞いてないの？あなたがこれから住むのはこの女子寮よ」

・・・え？

？？「大丈夫、ちゃんと女装すれば女の子に見えるから、心配しないでいいわ」

つまり俺に女装をしようと囁うのか？冗談じゃない、そんなことするぐらいなら野宿をした方がましだ。

一刀は手を振りほどこうとしたが女だとは思えないほどの力で引っ張られ、結局流されるまま女子寮の中へ連れていかれた。

寮長「おーそいつが今日から入る奴か、なかなかいい顔してるじゃないか」

一刀「えーと・・・とりあえず帰らせてもらつていいですか？」

寮長「だめだ。今日からお前はこの寮にすむんだ、男なら普通は喜ぶような場面じゃないか」

一刀「喜びませんよ！何よりばれたら・・・」

？？「その点に関しては大丈夫よ、私もばれないで1年以上ここに住んでるんだし」

一刀「あなたはばれなくても俺は・・・つて今なんて？」

？？「私も女装がばれないで1年以上住んでるわよ？」

一刀「えーと、つまりあなたは・・・」

？？「正真正銘男、なんなら証拠見せてあげようか？」

一刀「…………」

寮長「ま、そういうことだ、いわば女装のプロフェッショナルだから、そいつに任せとけば問題ない。」

？？「そうそう、危なくなつたら私がフォローするし、安心していいわよ？」

一刀「いやそういう問題じゃなくて……」

寮長「あーもう面倒なやつだなー杏樹ー…わざと女装をせちまえー。」

杏樹「はーい」

一刀「ちょっとまで、俺の意見はーー。」

寮長「無視！」

一刀「ぎゃー…………」

杏樹「はい、完了！」

一刀「うう…………」

一刀は仕方なく鏡をみた。もしもその姿がばれればな女装であればすぐにも女装を解いて逃げようと思っていたからだ。だが鏡に映つていてる自分の姿はどこから見ても女にしか見えない完ぺきな女装だった。

寮長「おお、なかなかにあつてんじゃねーか、それだと普通に行けそうだな。それじゃ杏樹、後はまかせた！」

杏樹「はーい、それじゃーーーと名前まだ聞いてなかつたわね、君の名前は？」

一刀「一刀、漢字の一に刀とかいてかずや」

杏樹「私は安樹、漢字は読者には分かつてゐるから気にしないでいいわ」

一刀「読者…………？」

杏樹「それより今からこの女子寮で過ごすためのルールを教えてあげる、ちゃんと聞いていてね？」

杏樹が言つたルールは簡単に言つとこんな感じだった

- 1、お風呂やシャワーは各自の部屋にあるからそれを使う
- 2、女子寮にいる間は常に女装をしておくこと
- 3、学校に空き教室を作つてもうつてこるからそこで着替えて教室に行くこと

そのあとも寮長に交渉を続けたが結局しばらへの間女子寮に住み、それでも嫌なり出て行つてもいい、と言われ、仕方なくここに住むことになつた。

一刀「はあ・・・

自分の部屋のベッドに座つため息をつく。

一刀「なんでこんなことに・・・」

こんなことになるのであればおとなしく組織の用意した家で我慢しておぐべきだったと後悔していた。

一刀「なつちやつたものは仕方がない、とにかくばれないよつて気をつけないと・・・」

そういうことをつべつとベッドに寝てひびき開扉にためておいた

## 校長にだまされた……（後書き）

ほとんどノリで書いてちゃいました。感想を頂けると嬉しいです。とにかく「良かった」や「面白かった」ではなく「ここがダメ」「面白くない」などの方が作者は喜びます。純粋に感じた感想をお待ちしております。

次の投稿はある程度頭の中でできてるのできるだけ早めにしたいと思います。見てくださっている方のためにも頑張りますよ～（・・・）

## 男としての学園生活（前書き）

転校して間もない時期にやつてくる組織からの連絡、その仕事の途中で起こる事件でいろいろな関係が変化していく・・・さて、今回から少しシリアスな場面も増えてきます。作者はあまりシリアスな場面は書かないでの、雰囲気、ぶち壊しな箇所もあるかと思いますが、それが作者の特徴だと思って読んでもらえば、と思います。

## 男としての学園生活

一刀「今日からこの学園に通うことになりました如月一刀です。よろしくお願ひします」

あまり目立たないよう、できる限り普通の学生らしく挨拶をする。

担任「それじゃ、奥の空いてる所に座つて」

言われた通り誰も座つていない机へ向かう。そのあといろいろと連絡事項を話した後担任は教室から出て行つた。そして恒例の転校生に対する質問攻めが始まつた。

さすがに今まで何度も転校してきただけあって質問攻めにも動じず

に答えられるようになつていた。

一刀（初めてのこりはボロが出ないか不安で仕方なかつたのにな・・・）

しばらく質問に答えているときなり周りの人達が遠ざかつた。どうやら誰かを避けているらしい。

慎二「やあ、初めまして僕は慎二っていうんだ。ダーリンって呼んでくれればいいよ」

一刀「・・・なるほど」

すぐに周りの人達が遠ざかつた理由を理解した。どうやらこいつが原因らしい。

慎二「どうしたんだい？ そんなに僕の顔を見つめて、もしかして僕のことが好きになつたのかい？」

一刀「好きになんかなるはずないしむしろ嫌いになつた。それにお

前の顔を見つめてもいない」

慎二「そんな照れなくともいいんだよ別に、むしろ大歓迎さー。」

良く考えるとこいつがいればあまり人と関わらずに済むか・・・

一刀「そうか、なら俺の半径10m以内に入らなければずっと近くにいてくれても構わない」

慎二「それって近くにいけないよね・・・」

一刀「さて、授業の準備をするかな」

そういうて授業の準備をし始めると慎一はちょうど10m位離れた場所まで行つてこちらを見つめ始めた。正直とても気持ち悪い、おかげで周りの人はいなくなつたが。

そして昼休み、一人で食堂に行こうとすると4人ぐらいの男子が近寄ってきて一緒に食べにいかないかと誘いに来た。普通なら愛想よくOKする所だが俺はできるだけ一人でいたかつたので丁重にお断りすることにした。

だが流石に毎日それをしていると周りの人の反応も変わつてくる。今までの学園でもそうだった。誘う度に断られていたら最後にはさしことをやめる。そして俺は一人になれる・・・はずだった。この学園の生徒は今までとは一味違つていた。俺が誘いを断つていると今度は食堂で待ち伏せをして同じ席に座るようになつた。同じ席に来るな、なんてことも言えないでの仕方なく同席で食べる」とになつた。

さらに遊びの誘いも断り続けていたら今度は俺の帰る時間に合わせて集団で下校するようになつっていた。

一刀（そういえば最後に誰かと一緒に下校とかしたのはいつだつたつけな・・・）

人との関わりを極力避けるようにしていた俺は「誰かと一緒に」なんてことはほとんどなかつた。

それが一番悲しまなくて済む方法だと思っていたから、そうしないといつか悲しい思いをしなくちゃいけなくなるから。

一刀（俺も不思議な力がなかつたらこんな風に笑いながら生活を送れたんだろうな・・・）

だがそれはあり得ない、使わないで生活することはできるが組織の命令が下ればすぐにでも動かなければならぬ。そうなればやはり普通の生活はできない。でも・・・

そんなことを思つてゐるといつの間にかクラスメートはいなくなり、自分一人になつていた。

一刀「・・・学園に戻つて着替えないとな  
そういうと再び学園へと戻つて行つた。

女子寮に戻ると寮のメンバーが食事を並べて待つていた。

那美「お疲れさまー、今ご飯いれてくるねー」

そういうてご飯を入れに行つたのが2年の羽生 那美、女子寮の炊事役であり母親のような存在。

香蓮「ちょっと有希さん！私のおかずをどうないでください！」

そしていま叫んだのが3年の野々宮 香蓮、被服部の部長で結構なお嬢様らしい。

有希「へへーん、取られる方が悪いんだよーだ」

今おかげを口に入れたまま走り回つてのが1年の三枝 有希、女子寮で唯一の1年であるが、言動や行動はどう考へても年下ではない。

茜 「有希、そんなことしてたら那美に怒られるよ？」

鷺沢 茜、女装した主人公、つまり如月一刀である。女子寮での名前。

那美「有希ー？なにしてるのかなー？」

那美は笑顔で有希に迫つてゐる。正直ものすごく怖い。

有希「あーいやーあのーえとですね、香蓮さんがおかずが食べきれないって言つてましたので代わりに食べてあげたといいますかなんというか・・・」

那美「次やつたらご飯抜きだからね？」

有希「ごめんなさい・・・」

そういうと有希はおとなしく自分の席でご飯を食べ始めた。この寮の中で料理ができるのは那美だけだから逆らつと本当にご飯が食べられなくなる。ある意味寮長より位の高い位置にいるかもしけない。

茜 「ごちそうさまー」

そういうと食器を流し台の方へ持つて行つたあと、2階にある自分の部屋へと戻つて行つた。

一刀「疲れた・・・」

そういうつて制服から私服に着替えていたと組織から連絡があった。

一刀「また仕事か・・・」

転校して間もないこの時期に仕事があるといふことはおそれくまたあいつだろう。

そう思いながら携帯をとり、本部からの連絡を聞いた。どうやらあいつが町に出現したらしい。

それだけ聞くとすぐに服を着替え、窓から外に飛び出した。

一刀「頼むから誰もいいでくれよ・・・」

そう願いながらあいつが出現した場所に急いだ。そして願いは叶わなかつたことを確認した。

那美「な・なにこれ・・・」

そこには人の形をした影と那美が向かい合つて立つていた。

一刀「よりによつて那美がいるなんて・・・」

ここで那美を助けに入れれば今までと同じ、きっと俺は恐れられこの町から追い出されるだろう・・・

せつかくあんなにいい奴らと出会えたのに、また別れなきやいけないのか。それは嫌だ、短い期間でも俺と一緒に過ごした奴らと別れるのはつらいに決まつてる。ならいつそ、那美を助けないでいれば・

・ 助けないで見て見ぬふりをすれば俺はばれないで済む、そうすれば・  
・

那美「こないで・・・」ないでー！」

その声を聞いた瞬間今まで考えていたことを忘れて飛び出していた。

一刀「伏せろ！那美！――」

那美はその声を聞くと頭を抱えてしゃがんだ。そしてそのまま上を通りそのまま影に向かつて一撃をくらわせる。

影「グッ・・！――」

そのまま影は後ろに倒れた。

那美「如月・・君？」

一ノ「大丈夫か？那美」

那美・ハ・シ・ハ・ン大女夫

一万一千 絶対に俺の後ろから離れるな、 分かってたな」

那美

「や、や倒れた影かぬいぐらと超毛上かねばとしゆる。今なり・・・  
一刀「天を司る光の聖靈よ、我に力を・・・闇を討つ力をあたえたま  
え！」

影は叫ぶとそのまま灰になつて消えた。

一  
刀  
劍  
經  
典

「今は向先言わずに帰つてくれ、明田にでも説明する」

那美「…………わかつた」

そういうと那美は女子寮の方へ帰つて行つた

八  
元

じね／＼周りを確認した後携帯を取り出し組織へ連絡をする。

一刀「こちら一刀、影の討伐を完了した」

組織「了解、今救援部隊がそちらに向かっている。建物などの修理

「おもかげ任せでおこ」

携帯を切らしてから、彼女は、毎日、彼のことを想ひ、彼のことを慕つてゐる。

一刀（明日には俺は町を追出されるだろうから、今日ぐらいこわいい）

卷之二

次の日の朝、一刀は部屋の片づけをしていた。すぐにでもこの町を出ていけるように・・・

した。・・・追い出されるより、自分から出て行つた方が辛くないから。

そして学園に着いたときに誰かが校門の前に立つてゐるのに気がついた。

一刀（こんな時間に誰が・・・？）

一刀が近付いていくとそこには那美が立つていた。

那美「あ、おはよう」

一刀「お・・・おはよう」

那美「あの・・・昨日のことなんだけど・・・ちょっとといいかな？」

一刀「ああ、教室で話そうか」

そういうと一人は教室へ入つて行つた。

那美「あの、昨日はありがと」

一刀は驚いた、今までそんな反応をした人がいなかつたから。

一刀「昨日の、見てなかつたのか？」

那美「見てなかつたつて何を？」

一刀「俺の力だよ、影に向かつていつた時の」

那美「ああ、見てたよ」

一刀「ならなぜ俺のことを怖がらない？今まで俺の力を知つた奴はみんな俺から離れて行つた。なぜお前はお礼なんか言つんだ・・・」  
那美「たすけてもらつたんだもん、お礼を言つるのは当然だよ。それに如月君、あの時とつてもカツコよかつたよ。私を守つてくれたんだもん、怖がるはずないじやん」

那美は笑顔で答えた。

一刀「羽生・・・」

那美「ごめん、如月君、日直があるから行くね」

そういうと那美は自分の教室まで走つて行つてしまつた。

一刀「・・・かつこいい・・・・・か」

そういうと自分の席に座り、クラスメートが来るまでの数分間、今日くらいは誰かと遊びに行こう、そんなことを考えながらクラスメートを待つていた。

## 男との恋の学園生活（後書き）

さて、ここまではまとめて書いていましたが次からはもう一句もないのです。どうなつていくかは作者にも分かりません。できる限り早く書いていこうとは思いますが、どうしても文章がうまく書けないため更新は遅くなるかと思われます。どうかやっくりと作者にお付き合っていただければと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1267m/>

---

女装生活～学園と寮との2重生活～

2010年12月13日19時21分発行